別記様式第19号（第32条第２項関係）

論 文 審 査 の 要 旨

報告番号	保研 第 28 号		氏 名	中村 篤
審査委員	主 査	窪田 正大		
	副 査	簗瀬 誠	副 査	大重 匡
	副 査	永野 聡	副 査	山下 亜矢子

Meaningful Activities and Psychosomatic Functions in Japanese Older Adults After Driving Cessation

運転中断後の日本人高齢者における重要とする活動と心身機能

主査及び副査の5名は、令和4年1月25日16時から17時にかけて、学位請求者中村篤に論文発表を行わせ、論文審査を実施した。その発表要旨と審査結果は以下の通りであった。

【目的】高齢者の運転中断は、筋骨格や視力低下などの問題の他、認知機能低下や抑うつ、フレイルなどのリスクが増加するなどの報告がある。また、高齢者の活動や参加においてもマイナスの影響を与える可能性があるが、意味のある活動に従事することは抑うつや満足度に寄与するとの報告もある。しかしながら、運転中断者がどのような活動を重要としているのかという点については、先行研究で明らかにされていない。そのため、地域在住高齢者の活動参加に対する支援や環境変化へのアプローチに対する示唆を得ることを目的として、高齢者の重要とする活動について、運転状況の違いや女性の特徴および運転頻度による違いについて調査した。

【方法】対象は、垂水研究2018に参加した高齢者594名であり、重要な活動の聞き取りには作業選択意思決定支援ソフトを用いた。活動に対する満足度と遂行度をそれぞれ5段階と10段階で評価しており、その他に握力・抑うつ・認知機能・活動能力などの心身機能に関するデータや運転状況について調査された。対象者は運転状況の違いにより運転群と運転中断群の2グループに分けられ、各群における重要とする活動や心身機能の違いについて解析された。さらに、性差による影響を排除するため女性のみでの解析や運転群は運転頻度の違いによる解析も行われた。

【結果】運転中断群は運転群との比較において、家庭生活を重要視している者の割合が多く、低い握力や活動能力、そしてアパシーおよび身体的・社会的フレイルの割合が多い結果となった。また、運転群は運転頻度の減少により、握力が低く、アパシーと社会的フレイルの割合が多い結果となった。

【考察】運転中断を検討している高齢者に対しては、重要とする活動に焦点を当て、継続的に従事することや代替えとなる活動の検討を支援する必要性があると考えられた。また、中断に向けては、家族や友人らによるサポートなどの要素を含め、早期から計画を立てることの重要性も確認された。研究の限界については、両群の年齢の違いを考慮することや運転中断の影響を明確にするような更なる調査の必要性が確認された。しかしながら、地域在住高齢者が重要とする活動に焦点を当てた研究として、これまでにない知見を得ることができたため、高齢者の運転中断に寄与する有益なものであると考えられた。

審査の結果、５名の審査委員は、本研究によって得られた結果が、運転中断を検討する高齢者の支援に汎用できるものであることから、本論文が博士（保健学）の学位論文としての価値を十分に有すると判定した。